

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム  
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」  
による派遣研究者研究報告書

平成 26 年 6 月 7 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	水越 楓

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
北海道目梨郡羅臼町
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
北海道に来遊するシャチの音声調査
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 5 月 14 日 ~ 平成 26 年 5 月 18 日 (5 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
北海道シャチ研究大学連合 (Uni-HORP)
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<b>1. はじめに</b> 今回の調査では、北海道羅臼 (根室海峡) に来遊するシャチの音声データの取得、個体識別を中心に調査を行った。私が参加したのは 5/16-17 の 2 日間であったが、調査全体は 5/16-22, 24-25 の 9 日間行われた。調査はコーディネーターの斎野重夫氏を中心に、北海道シャチ研究大学連合 (Uni-HORP) によって企画・実施されたもので、観光船 “はまなす” に乗船し行われた。
<b>2. 調査概要</b> 調査開始前日、5/15 に羅臼入りをした。この日は天候がよく風であったため、夕方ごろクジラの見える丘公園から目視で探鯨したところ、岸近くにイシイルカ 3~4 頭を発見するも、シャチは見当たらなかった。今年は流氷がなかなか去らず、例年の五月よりもシャチの来遊が遅いようだ、地元の観光船の方々から伺った。我々の調査開始日である 16 日から暴風雨・暴風雪で警報が外れず、羅臼にしては珍しく欠航が続く形となってしまった。
●5 月 16 日 天候不良のため欠航が朝決定。 午前中は、知床ネイチャークルーズさんに挨拶に伺う事となった。そこで、観光船エバーグリーン船長・長谷川正人さんから、今までの羅臼について、今年の羅臼の様子などをうかがう事が出来た。今後も羅臼で調査を続けていくに当たり、有意義な時間を過ごすことができたと思われる。

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム  
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」  
による派遣研究者研究報告書

午後は、時化の時に往く講義を開講することとなった。今回初めて自身の担当を持ち、(専門学生を中心とした)調査参加者にむけて、昨年度に行った卒業研究やこれからの研究について説明を30分程度行った。調査に参加している先生方や学生との意見交換を行う事が出来、今後の研究や調査を考えていく上でとても参考になった。

次にアシスタントとして同行していただいた、野生動物研究センター修士二回生の榊原香鈴美さんに講義をしていただいた。御蔵島で行っているミナミハンドウイルカの調査の概要を教えていただいた。北海道シャチの研究と比べ、御蔵島では長期にわたるモニタリングを行っており、個体識別も完了している。今後北海道のシャチ調査を継続し長期的に行っていくためには、こういった事をしていけばいいのか参考にしていきたい。また、他の鯨類の調査に参加したことがなく、水中撮影を中心とした調査方法にも興味があるため、とても参考になった。

●5月17日

天候不良のため欠航が朝決定。

午前中は知床ネイチャークルーズでガイドをしていらっしゃる大木絵里香さんに、ホエールウォッチングガイドになるまでの経験や、ガイドとしての心構えなどを講義していただいた。

午後、いつもお世話になっている観光船“はまなす”の事務所に挨拶に行き、今回の調査と六月に行う調査について少しお話をさせていただいた。

夕方からは常磐大学教授の中原史夫先生の最新の研究について講義していただいた。佐世保にある

水族館・海きららで行っているイルカの社会的知性についての研究で、仲間をどう認識しているのか・協力行動をしているのか、というものであった。夜には、音響機材の使い方の引き継ぎや、記録方法などの確認を研究チームメンバーで行った。



写真1 知床ネイチャークルーズにて

(撮影：斎野重夫)

### 3. まとめと今後

今回私が参加できた日数が、屋久島実習のため二日間と短くなってしまったことから、天候不良で海に出ることがかなわなかった。しかし、そのおかげで勉強会や地元の方々へのあいさつ廻りなどをしっかりすることができたため、今後の研究調査をしていくにあたり有意義な時間を過ごすことができた。

今年度のシャチ調査は2回目で、初回の網走では流氷のためシャチに遭遇することが出来なかった。羅臼も季節外れの雪に当たり、その後もシャチに遭遇することが叶わなかった。例年五月は遭遇率が高いが、今年は流氷が遅くまで残っていた影響か、例年と同様というわけにはいかなかった。調査は数か月前から日程を決めるため、流氷などを予測することが難しく、一週間程度の短期間の調査のためタイミングがずれるとデータ取得自体が

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム  
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」  
による派遣研究者研究報告書

困難になってしまう。今後の期間や時期を考える上で今回の調査は考えさせられるものとなってしまった。六月末にも同様の調査を行うので、準備を進めていく。

**6. その他**（特記事項など）

今回の調査のコーディネートをしてくださった、斎野重夫さん、Uni-HORP チームの東海大の大泉宏先生、佐々木史織さん、水野志保さん、磯部詩織さん、常磐大学の中原史夫先生、アシスタントとして同行してくださった WRC の榊原香鈴美さん、はまなすの浜松貢船長、杉田知香さんにお礼申し上げます。